



佐藤春夫 集

現代日本文學全集

30



筑摩書房版

佐藤春夫集

昭和二十九年一月十五日 印刷
昭和二十九年一月二十日 發行

著者 佐藤春夫

東京都文京區台町九

發行者 古田晁

東京都青梅市榎ヶ布三八五

印刷者 山田一雄

東京都文京區台町九

發行所 筑摩書房

電話小石川(92)五一・二〇五七
振替 東京 一六五七六八

クロース 日本クロース工業株式会社
印刷 株式会社精興社
製本 欠島製本所

佐藤春夫集 目次

殉情詩集	一
田園の憂鬱	一三
神々の戯れ	一五
更生記	一六
西班牙犬の家	二五
お絹とその兄弟	二六
侘しすぎる	二七
窓展く	二九
秋立つ	三〇
女誠扇綺譚	三〇
陳述	三三
F・O・U	三四

女人焚死……………三六

鷺江の月明……………三八〇

パリ島の旅……………三八七

「風流」論……………三九九

詩人・佐藤春夫（河上徹太郎）……………四〇八

解説……………四二二

年譜……………四三六

装幀 恩地孝四郎

佐藤春夫集

老來自ら能火野人と号す
蓋し紀州熊野此立産生涯流
寓して思郷の念切ならず

昭和二十八年初冬

佐友喜夫

于時六十三才

殉情詩集

殉情詩集自序

われ幼少より詩歌を愛誦し、自ら始めてこれが作を試みしは十六歳の時なりしと覺ゆ。いま早くも十五年の昔とはなりぬ。爾來、公にするを得たるわが試作おほよそ百章はありぬべし。その一半は抒情詩にして、一半は當時のわが一面を表はして社會問題に對する傾向詩なりき。今ことごとく散佚す。自らの記憶にあるものすら數へて僅に十指に足らず。然も、些の憾なし。寧ろこれを喜ぶ。後、志を詩歌に斷てりとは非ざりしも、われは無才にして且つは精進の念に乏し、自ら省みて深くこれを愧づるのあまり遂には人に示さずなりぬ。但、殉情の人は歌ふことにこそ纔に慰めはあれ、譬へば、かの病劇しき者の呻くことによりて僅にその病苦を洩すが如し。されば哀傷の到るものある毎にわれは恒に私に歌うて身をなぐさめぬ。又譬へば獵矢を負へる獸の森深く逃れ來りて、世を惡み人を厭ひて然も己が命を愛するの念はいや募り、己が口もて己が創痕を舐め癒さんと努むるが如し。

世には強記にして好事の士もあるものなり。面榮ゆくもわがかの詩作を今更に語り出でて、時にはこれを編みて冊子とせよなど勸むる友さへあり。されど誰かは、未熟にして早く地に墜ちたる果實を拾ひて客の爲めに饗宴の卓上に盛らんや。乃ち篤くこれを謝するのみなりき。この機にのぞみてわれは改めてかかる人人に乞はん。わが舊き詩歌は悉くこれを忘れたまへ。少しく言葉を弄ばんか、今日のものとても同じく然したまへ。然らば今この集を取て世に問ふの故は如何。曰く米鹽に代へんとす。曰く春服を求めんとす。否、われは口籠ることなくして言ふべし。聽き給へ、われ今日人生の途なかばにして愛戀の小暗き森かけに到り、わが思ひは轉た落莫たり。わが胸は鞆の下に碎かれたる薔薇の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人、兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なれば、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でていま路のべに來り哀歌す。節古びて心をさなくただに笑止なるわが笛の音に慌しき行路のいいかで泣くべしやは。たとひわが目には水流るとも、知らず、幾人かありて之に耳を假し、しぼしそが歩みを停むるやいかに。

嗟呼、わが嗚咽は洩れて人の爲めに聞かれぬ。われは情癡の徒と呼ばれるとも今はた是非なし。

大正十年四月十三日

佐藤 春夫

同心草

不結同心人
空結同心草
薛濤

水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののははれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。
げにいやしがるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

或るとき人に與へて

片こひの身にしあらねど
わが得しはただこころ妻

こころ妻こころにいだき
いねがてのわが冬の夜ぞ。
うつつよりはかなしうつつ
ゆめよりもおそろしき夢。
こころ妻ひとにだかせて
身も靈ものをのきふるひ
冬の夜のわがひとり寢ぞ。

また或るとき人に與へて

しんじつふかき戀あらば
わかれのこころな忘れそ、
おつるなみだはただ秘めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
歎ならぬ身といふなかれ、
ひるはひるゆるわするとも
ねざめの夜半におもへかし。

海邊の戀

こほれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき。
こほれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。

わらべをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手をとりにぬ
かひなきことをただ夢み、

入り目のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか
海べのこひのはかなさは
こほれ松葉の火なりけむ。

斷章

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、花ちりぬ。

琴うた

吹く風に消息をだにつけばやと思
へどもよしなき野べに落ちるこそ
すれ
梁塵秘抄

かくまでふかき戀慕とけ
わが身ながらに知らざりき、

日をふるままにいやまざる
みれんを何にかよはせむ。
空ふくかぜにつけばやと
ふみ書きみれどかひなしや
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ。

後の日に

つれなかりせばなかに
そらにわすれて過ぎなまし
そもいくそたびしほりけむ
たもとせつなしかのたもと。
せつなざわれにつもるとも
沾ちてはかわくものなれば
昨日のたもとにこと問はむ
ぬるるやいかなほけふも。

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや
うつくしきなれが乳ぶさも
いとあまきそのくちびるも

手をとりにて泣けるちかひも
わがけふのかかるなげきも
うつり香の明日はきえつつ
めぐりあふ後さへ知らず
よきひとよ、地上のものは
切なくもはかなからずや。

こころ通はざる日に

こころを人にさらせども
げにもとなげく人ぞなき
こころのいたで血を噴けど
あなやと叫ぶ人ぞなき。
すまじきものは戀にして
苦しきものぞこころなる、
こころはいとし、すべもなし、
手にはとられず目には見られず。

なみだ

あるはのきばゆたつけぶり、
あるは樋をゆくたにのみづ、
あるはわが目にわくなみだ。

埋火もきゆや泪の蒸る昔芭蕉

これをさだめとさとるゆゑ、
せひなきものと知るらめど、
とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそぼそと、
ひとすぢにこそながるらし。

感傷肖像

摘めといふから
ばらをつんでわたしたら、
無心でそれをめちやめちやに
もぎくだいてゐる。
それで、おこつたら
おどろいた目を見ひらいて、
そのこなごな花びらを
そつと私の手にのせた。
その目は涙ぐんで笑ひ
その口は笑つて頬は泣いてゐる。
表情の戸まよひした
このモナリザはまるで小娘だ。

感傷風景

あなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ、
あなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ、

わたしはうつとりと東の方の海をうかがひ、
然しふたりはにこにこして同じ思ひを樂しむ
とありし日のある家の明いバルコン。
何も知らない家の主人にはよき風景をほめ、
ふたりはちらちらとお互の目のなかを樂しむ。
戀人の目よそれはまあ何といふ美しい宇宙だ
らう。

全くあなたのその目ほどの眺めも花もどこに
あらう……

おお、思ひ出すまい。ふたりは庭のコスモス
より弱く、

幸福は卓上につと消えた鳥かげよりも深く儚
く、

歎きは永く心に建てられた。あの新築の山莊
のやうに。

晝の月

舊作のうち記憶に残れるもの三四。
別に「晝の月」及び讀み人知らぬ
古曲の一節を拾ひてここに採録す。
舊作は概ね數年前わが二十二三歳
ごろの作なり。

ためいき

一

紀の國の五月なかばは
椎の木ついでのくらき下かげ
うす濁るながれのほとり
野うばらの花のひとむれ
人知れず白くさくなり、
佇みてもののおもふ目に
小さななみだもろげの
素直なる花をし見れば
戀人のためいきを聞くこちするかな。

二

柳の芽はやはらかく吐息して
丈高くわかき梧桐はうれひたり
杉は暗くして消しがたき憂愁を祓め
椿の葉目の光にはげしくすすり泣く……

三

ふといづこよりもなく君が聲す。
百合の花の匂ひのごとく君が聲す。

四

なげきつつ黄昏の山をのほりき。
なげきつつ山に立ちにき。
なげきつつ山をくだりき。

五

蜜柑みかんはたけに來て見れば
か弱き枝の夏蜜柑
たのしげに
大なる實をささへたり。
われもささへん
たへがたき重き愁を
わが戀の實を。

六

ふるさとの柑子の山をあゆめども
癒えぬなげきは誰がたまひけむ。

七

遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて
われは心からなるまことの愛を學び得たり
そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女の願ふことなき日も
聖母マリアの像の前に指を組む心なり。

八

死なんといふにあらねども
涙ながれてやみがたく
ひとり出て付みぬ
海の明けがた海の暮れがた
——ただ青くとほきあたりは
たとふればふるき思ひ出
波よする近きなぎさは
けふの日のわれのころぞ。

少年の日

1

野ゆき山ゆき海邊ゆき
眞ひるの丘べ花を藉き
つづら臙の君ゆゑに
うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたどり
夢ふかきみ臙を戀ひ
なやましき眞晝の丘べ
花を藉き、あはれ若き日。

3

君が臙はつぶらにて
君が心は知りがたし。
君をはなれて唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸編む
銀の編み棒に編む糸は
かぐるなる糸あかき糸
そのラムプ敷き誰がものぞ。

二つの小唄

男のうたへる
ひとりものかや二十日月、海の夜あけにのこ
りたる。

女のうたへる
かがみくもらすわがといき、夕べは月の暈と
なる。

むかし、いかなる人のいか
なるをりにやのこしたりけ
む、かかる戀慕の祕曲ひと
ふしあり。

しんじつこひしきものならば、つまも子もある
ものか、ともおほすらめども、おもへども、わ
りなきよえにしたたれず、切なしやゆるさせた
まへ、なわすれそ、互に、けふを。と、なげば
ぜひもなしや、しんじつこひしきものゆゑに血
をながしてもともおもへども、おもへども。あ
きらめてさても得わすれで、おもかけ。ゆめに
見てゆめさめて、あなわが身、わが世、憂き世。

晝の月

野路の果、遠樹の上、
空澄みて晝の月かかる。

あざやかに且つは仄か
消ぬがに、しかも嚴か。

見かへればわが心の青空、
おお、初戀の記憶かかる。

心の廢墟

「主よ、わが心の爲めに
さまよへるシオンの娘を
遣しめよ。」

「さまよへるシオンの娘よ、
わが心に来れ、

わが心は心の礎に坐して哭け。

「來り見よ、シオンの娘、
わが心は荒果てて

汝がふるさとの都のごとし。

「來り哭け、シオンの娘、
わが心の廢墟はいま

かがやけるみ空の月かげに濕ふ。」

かく歌へるわが歌により
シオンの娘ひとり來り

しばしわが心に坐して哭きぬ。

坐して哭けるシオンの娘は
されど、現世のものには非ず、

これけこれ影の影にして。

影は影なる聲によりて哭く、
わが心の廢墟より

いや深き寂寞を揺起して哭く。

斷片

われら土より出でたれば土にかへる
われら裸にて生れたれば裸にて生く。

けにもよ——
われらひとりにて産れたればひとりにて生く。

ひとりにて生きて、さてひとりにて死にゆく
……

わが溜息

夜もすがら日もすがらわが長息け
どもそも誰がためと問ふ人もなし

わが躰は陰府にくだる細き徑にして

わが溜息は陰府より洩るる風なれば
とほくかすかに通ひ來りてわが唇の上に消ゆ。

われはわれひとりしてわが溜息をもらし
その一息ごとに陰府の近さを測り知る。

人あり、これを感じこれを聞くとも

わが溜息をおもひやらすわが爲めに泣かず
ただ身ぶるひしてひたすらにこれを惡み怖る。

げにそは屍のにほひを帯びて暗く冷く
光達しがたき底よりもるる風なれば。

心の廢墟

その戀人の中にはこれを慰むるもの
のひとりだに無くその勝はこれに
背きて仇となれり 耶利米亞哀歌

ルネ・チオルジャン「水邊悲歌」
堀口大祐譯

メフィストフェレス登場

海につづける城の櫓。
夜。波の音きこゆ。
思ひ沈める騎士ひとり。
この時、メフィストフェレス登場。
「今晚は！
大そう陰気なお顔をして
お淋しさうだ。
ちよつとお話相手をさせてください。
さて、一本氣な殿様！
物語風の騎士！
君は近ごろ立派なお城を建てましたね、
噂を聞いて參上して見たが、
見事！見事！
それに思ひ出といふ貴女の
青ざめた亡靈によく奉仕して御座る。
感心！感心！
ところで殿様。
お城は飛んだところへ建てましたなあ。
足場は大丈夫ですかい。
一たい私はその道のくろうとだが——
ちよつと御覽。
さて智恵のない地盤さね、
まるでこれや女ごころの沙濱だ。

「それ！ 風が吹けば沙丘
波が荒れば洲……」
メフィスト雙手をひろげて風と波との身ぶり
よろしく闊歩す。
「……どうです。
僕がかうちよつと歩いただけでも、
何と！ 少々は揺れませう。
これや一そう中空へ建てた方がましたつた。
なるほどお城は立派さね、
今さら立退くのは惜しいやうだ。
だが悪い事は言はない、
もういいかげんに立退いては！
それとも殿様！
お城の崩れる日を待つて
幽霊と心中なさるお心掛けですかい。
それもよからう、御隨意だ。
私は他人の意志は尊重しますからね。
おや、おや！
これやお氣に觸つたかな。
それではせいせいおひとりでお泣きなさい。
たまにはしんみりひとりを知るのも身の爲
めです。
さやうなら。
陰気なところに長居は無用だ。
どうれ、ちよつと寄り道をして
あのしやれた一組を見て来ようか、
奴等は全くしやれて居るよ——
泣きながら唇を吸ひ合つて靈とやらの傷を
甜あつてゐるのだから……」

突然、騎士は立上り、長劍を抜きてメフィスト
を刺さんとす。
この時櫓はおもむろに少しづつ傾く事。
騎士は聲を上げて呻く。
見えざるところよりメフィストの映笑聞ゆ。
騎士はよろめき倒れんとして僅に劍によりて身
を支ふ。

夜深くして歌へる

わが歎きの歌

燈暗無人詠斷腸 陸放翁

……わが歎きは終にわがものなれば
人、これをかへり見ず。
又かへり見ることを我は許さず、
ヨブの友よ來りてヨブを慰めされ。
わが歎きよ、おおわがものよ、
われは限りなくなんぢを愛す、
彼等が妻になすがごとく
また彼の女らが幼子になすがごとく。
わが歎きよ、ただ一つなるわがものよ、
われは、妻なく幼子なきわれは
夜もすがら強くなんぢをかき抱きて
なんぢがうへにわが涙を盡す。
おおわが歎きよ、わがひとり子よ
なんぢが母はわが戀にして
なんぢが母はなんぢを遺して早く去りぬ。

なんぢよ、なんぢは面かげ母に似てかなし、
わが歎きよ。なんぢ生ひ育て。
永く生きよ。息絶ゆること勿れ。

われをして永く具になんぢを愛し
なんぢに依りてなんぢの母が面かげを忍ばし

めよ。

われは今、母なきなんぢをかく強く抱く。
夜ふかし、見ずやわが子、

なんぢが母の亡靈は今宵もまた來りて

われとなんぢとの傍にやさしくも添寝したり

……

聖地パレスチナ

聖地パレスチナは何時まで聖地なり。

たとひ異端の寺立ち並び、異端の都となり

異端の弓檣の上に異端の星集ひ耀き

パレスチナの水は異端の噴井よりふき溢れ

異端の徒は異端の怪しき花を蒔き

パレスチナの土は異端の種を培ひて

荊ある異端の花を花ざかりにするとも、
歎く勿れ、そのかみの聖地、今日の聖地、後

の日の聖地、

一たびまことの聖地なりしパレスチナ

吾がパレスチナぞ何時までも吾が聖地なる。

田園の憂鬱

或は病める薔薇

I think alone

In a world of moans,

And my soul was a stagnant tide,

Edgar Allan Poe

私は、呻吟の世界で

ひとり住んで居た。

私の靈は澱み腐れた潮であつた。

エドガア アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現れて來た。初めのうちは、大變な元氣で砂ほこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついで居た彼の二足の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ隨いて來るやうになつた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、「ああやつと來ましたよ」と言ひながら、彼等の案内者である絨毛の太つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片手で

は、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を傳うて、彼等の瞳の落ちたところには、黒つばい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそれはそれは夏の朝の光のなかで、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光つて居るささやかな萱葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上さまよつて居た彼等の瞳を、互に相手のそのの上に向けて、瞳と瞳とで會話をした——

「いい家のやうな豫覺がある」
「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思つた。その草屋根を焦點としての視野は、實際、何處でも見出されさうな、平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に擇んだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

廣い武藏野が既にその南端になつて盡きるところ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする變化——言はば山國からの微かな餘情を湛へたエビロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此處にも起伏して、それが

形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿つて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、譬へば三つの劇しい旋風の境目に出來た眞空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しよんぼりと置かれて居るのであつた。

一たい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく樂しみ、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ驚かされた。しかもその平靜な四邊の風物は彼に珍らしかつた。ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と險しい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きて居る一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長々と浮べさせて押合ひながら荒々しい海の方へ、轟き合つて流れてゆく彼の故郷のクワイマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雜木原と、田と、畑と、雲雀との村は、實に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻嚴な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「歸れる放蕩息子」に自分自身をたとへた彼は、息苦しい都會の眞中にあつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなか

へ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おお！そこにはクラシツクのやうな平靜な幸福と喜びとが、人を待つて居るに違ひない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity! 空の空、空の空なる哉都て空なり」或は然うでないにしても……いや、理窟は何もなかつた。ただ都會のただ中では息が屏つた。人間の重さで壓しつぶされるのを感じた。其處に置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、其處が彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤獨にした。「嗟、こんな晩には、何處でもいい、しつとりとした草葺の田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思ふ存分に延ばして、前後も忘れる深い眠に陥入つて見たい」といふ心持が、華やかな白熱燈の下を、石甃の路の上を、疲れ切つた流浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心のなかへ、切なく込上げて來ることが、まことに腰であつた。「おお！深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう？深い眠！それは言はば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。即ち肉體がほんとうに生きてゐる人の法悦だ。俺は先づそれを求める。そのある處へ行かう。さあ早く行かう！」彼は自分自身の心のなかでさう叫びた。或は、口に出してさへ叫びた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名づけやうのない心が、その何處とも知れない場所へ、

自分自身を連れて行けとせがむのであつた……。(彼は老人のやうな理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもつた青年であつた。)

その家が、今、彼の目の前に現れて來たのである。

道の右手には、道に沿うて一條の小渠があつた。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れて行き流れて來るのであつた。雑木山の裾や、柿の樹の傍や厩の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぼつかり大きな百合や菜を咲かせた農家の庭の前などを通つて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは深と言ひ度いやうな氣がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。へどろの褚土を洒して、洒し盡して何の濁りも立てずに、淺く走つて行く水は、時々ものに振かれて、ざらりざらりと柄になく閃いたり、さうかと思ふと縮緬の皺のやうに繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の發作のやうに光つたりするのであつた。或は、その小さな輝きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其處は細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野葵の一片たまりの藪だの、その外、名もな

い併しそれぞれの花や實を持つ草や灌木が、渠の兩側から茂り含ひかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の來た方をふりかへつて佇むのに似て居た。そんな時には土耳古玉のやうな夏の午前空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身輕く滑走し、時々その尾を水にひたして卵を其處に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乗つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに従つて居たが、何かの拍子について空ざまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい氣輕さが、自分の心に湧き出るので彼は知つた。さうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを想ふのが、彼にはうれしかつた。

劇しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が寶玉の一断面のやうに輝くと、それらの下から蟬は焼かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の眞中近く昇つて來て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繍のあるバラソル——貧しい婦の天蓋——では